

富士吉田あれこれ

河口湖口

富士山への登山者は毎年15万人を超え、平成19年には全体で24万人にもものぼる登山者が富士山を訪れています※1)。吉田口からの富士登山は、その大多数が自動車道路「富士スバルライン」を利用しているため、終点となる中腹の小御嶽を登山起点としたルートが「登山道」として一般的に認識されているようです。山頂を目指して歩いていくことには変わりはないので、広い意味での登山道に違いはないかと思えます。しかしながら、歴史的な認識から言えば、本来の登山道は北口本宮富士浅間神社を起点とした麓から登るルートであり、本来の五合目は滝沢林道の終点付近となります。スバルラインの終点にあたる小御嶽は、富士山の合目でいえば五合五勺あたり、小御嶽神社から泉ヶ瀧を経て六合目に向かう「登山道」も古くは御中道と呼ばれる修行の道でした。

かつて、甲州(山梨県)側の登山口には御師が集住する町がありました。江戸時代の地誌である「甲斐国志」の記述には、『北麓ノ村落吉田・川口二村ニ師職ノ者数百戸アリテ…』とあり、ひとつは吉田で、もう一つは、川口(河口)の御師町でした。川口の御師町は、その歴史も古く、中部方面の道者を受け入れ、多いときには140坊もの御師が集住し栄えた町でした。この河口か

らの登山ルートは、船津から胎内(船津胎内)を経て小御嶽に至る登山ルートであり、古くは元弘元年(1331)の地震で登山道が崩落したとの記録がみられます。しかし、江戸時代以降になると吉田口に登山者が引き寄せられ、その後の富士講の隆盛もあって、川口御師は次第に衰退していきました※2)。このような要因から登山道としては、利用が少なかったようで、御坂越えの登山者は、船津から吉田へ直接入ったり、船津胎内から中ノ茶屋へ出て吉田口を登るルートで利用していました。

さて、繁栄と衰退を繰り返し、変化してきた富士山ですが、現在でもさまざまな面での変化をみてとれます。その変化の一つに登山道の名称の表現が変わってきていることです。現在の六合目から頂上までの登山道は、古来より「吉田口」あるいは「北口」と称してきたものです。それが最近のガイドブック等の富士登山の紹介に登山道そのものを「河口湖口」と表記しているものを見かけるようになりました。これは、スバルライン五合目に発着する路線バスや富士北麓の観光ルートの起点がおもに河口湖駅になっているため、観光客に対して、より解り易い案内に傾けたために招いた解釈の現われだと感じます。実際に富士山の下山道には、スバルライン終点の方向



■富士山頂上御拜所御霊鏡図

を見誤らないように「河口湖」の案内表記が記されています。このような点からスバルラインそのものを河口湖口としてしまうことは、その起点からみてもいたしかたないのかも知れません。しかしながら、河口湖口とするスバルラインに引き寄せて、古来より吉田口・北口と認識されてきた人が歩いて登る登山道を同一的に一括りにしてしまう認識は、避けたいものです。

また、山小屋に付随する合目の表記にも変化が現れています。江戸時代後半と現在では、七、八合目辺りの小屋の合目表記が大きく変わっています。例にあげると食行身祿が入定した烏帽子岩は、現在でも歴史上の認識では七合五勺(三勺)ですが、隣接する山小屋の表記は八合目となっています。また、五合五勺の経ヶ

岳の下にある山小屋では「六合目」と表記されています。時代とともに合目の位置が変化していくのも富士山の特徴といえるでしょう。

過去現在を問わず、時代の流れの中で、そこに介在する人々の都合によって登山道やそれに付随する場などの解釈が変わってしまうという、いたしかたない現実があり、それも歴史の一部として刻まれていくことでしょう。そのような事象も踏まえて、我々は培われてきた歴史認識や地名を後世に正確に伝え残していくことが何よりの使命と考えます。

(布施光敏)

〔註〕
 ※1 環境省関東地方環境事務所調べによる。
 ※2 「富士の歴史」 富士の研究1 井野邊茂雄 1973名書出版

博物館Report

御師の町河口を歩く

富士河口湖町文化財審議会委員 中村章彦

御師の町河口を歩く

はじめに

富士河口湖町河口地区は、御坂山系・愛宕山(お寺山)・山宮を背負って南西に開けているため比較的暖かい地域です。河口湖へ流れ込む西川・寺川など何本かの川もあり水利の便にも恵まれたので、江戸時代から湖辺では唯一稲作が行われました。また、律令制時代には甲斐三駅の一つで駅家があった場所として知られ、中世から近世には「鎌倉往還」が通り、御坂峠

をはさんで国中と郡内、あるいは東海道と通じる交通の要衝の地でありました。さらに、御師の町として各地から訪れる道者(富士登拝者)で大いに賑わった歴史をもっています。今回は平成19年10月に当館の歴史散歩で散策した御師町、善応寺・川口社、御師の住居や門、河口浅間神社、母ノ白滝などを紹介します。



■寺川

御師の町

河口は御師の町として、河口湖辺で最も賑わった集落でした。御師は道者に宿や食事を始め登拝のための一切の世話をするとともに、登拝の指導を行うことを業とする人をいいます。いつ頃から河口に御師が存在したかは、必ずしも明確ではありませんが、近世初期には河口御師の元祖とされる「河口十二坊」と呼ばれる御師集団がいて、大いに賑わっていた様子が伝えられます。江戸時代に入ると、最盛期には140坊もの御師を数えることが出来ます。それらの御師の中には、毎年1月参府して將軍家の祈祷を行った三浦家のような御師もいました。

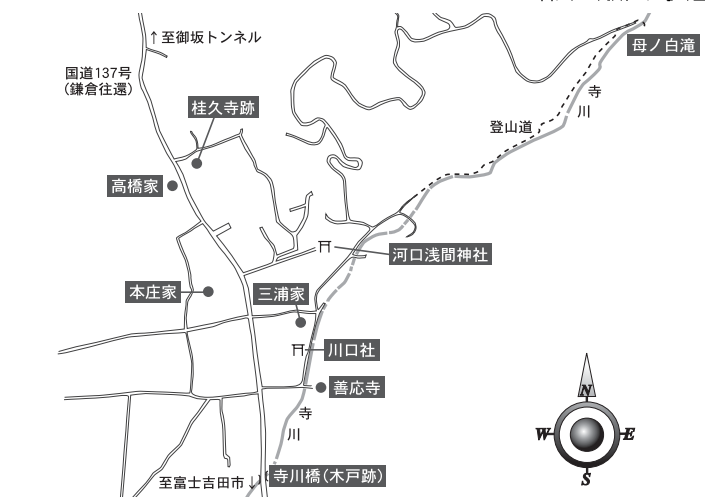
しかし、江戸中期以降、道者たちは、富士講の隆盛にともなって便のよい上吉田に宿泊するようになったので、河口の御師町は次第に衰退を余儀なくされていったようです。このように上吉田に比べ、衰退の時期が早かったため、遺構や遺物の残存状況は相対的に少なく、特に富士講関係のものは極端に少ないのが現状ですが、このことは「川口御師坊」(江戸時代は川口と表記した。)と富士講の関係をよく物語っていると思われる。とはいえ、御師町の景観を遺すものとして、タツミチがあり、短冊形の地割も残っていますし、住居や門もいくつか現存しています。

ところで、御師は登拝シーズンが終わると、今度は各地の檀家廻りを行いました。ですから、河口は登拝期には各地の道者が訪れて様々な情報をもちらし、登拝期以外は御師自身が直接各地へ出かけて行って情報を得てくるという、情報量の極めて豊富な地域であったことが想像でき、そういう点から、この地域の文化の中心地であり発信地でありました。

「けやーい」と撒き銭をねだる子供の声も聞こえたことでしょうか。そんなことをふと考えさせられる地区でもあります。



■呑川を利用した歩道



■河口関連図



■旧御師家の門

二つの木戸

河口は南北約1キロの町並みが鎌倉往還沿いに続いており、集落の南北の入口には木戸が置かれました。寺川橋(大橋)の近辺には南側の木戸があったと伝えられています。

寺川橋の袂で、鎌倉往還は東側に折れ、いわゆる「横町」方面へルートをとりますが、その角に木戸があったこととなります。

戦後20、30年代の三ツ峠登山が盛んだった頃には、母ノ白滝方面

から寺川沿いに下山してきたハイカーは、ここで国道を横切り、さらに直進して湖畔の渡船場へ急ぎました。現在も寺川橋橋詰に置かれたバス停は「渡船場入口」とあり往時を物語っています。

なお、北側の木戸は桂久寺辺にあったといわれ、中世の絵巻物「遊行上人縁起絵」にはこの木戸が描かれています。そのようなことから、河口には「木戸内」「木戸外」の呼称がありました。



■寺川橋

善応寺・川口社

善応寺は寺川橋から寺川を少し遡った左岸にあります。開基は河口左衛門、現在は大石の臨濟宗妙心寺派の海蔵寺が兼帯しています。往古河口十二坊は各々護持寺を持っていましたが、善応寺もその一つで大国谷(大黒屋)の護持寺でありました。河口は明治維新後村をあげて神祭に移行したこともあって、各護持寺の消息は判然としませんが、現在無住とはいえ建物が残っているのはこの善応寺だけです。

善応寺と寺川をはさむかたちで川口社があります。ここは中世河口の領主であった河口左衛門の屋敷跡とされ、地元では「おかぐっちゃん」と呼んでいます。『勝山記』によると、河口左衛門は文明7年(1475)極月10日「河口殿ヲ地下打取ル」とあって村民の下剋上にあって滅んだようです。余談になりますが、同じ年の8月に舟津の領主であった小林正喜は、勝山の御室浅間神社に神田を寄進しているのですが、この二つの事実は、奇しくも河口湖の南北領主の明暗を物語っており、当時の権力関係を考える上で注目されます。河口左

衛門の墓はここから少し離れた北浦にあります。

川口社のかたわらに、「森顕胤」[出雲連満鱈彦]の苔むした石の墓誌が2基立っています。森顕胤は白川家の学頭で、この頃川口に滞在し、上吉田の御師たちとも交渉があったようです。死亡したのも吉田地内であったと記録されています。森顕胤派遣の背景には、川口と上吉田で起きた御師許状をめぐる白川家、吉田家の争論があるように思われます。すなわち、宝暦10年(1760)に川口と上吉田でともに白川家の許状を返納させる騒動が起きているのですが、森顕胤が当地に派遣された理由は、白川家の

勢力挽回の意図があったのではないかと考えられます。

昭和3年に当時の河口浅間神社社司が著した「河口浅間編年史」は、天明5年(1785)「前白川学頭森顕胤客死ス(略)地藏寺ニ埋葬ス」と記し、河口には髪・爪を埋めたと記しています。大正11年に掘り起こしたところ、瓶が出てきたが中には土と小虫しかなかったと記録しています。一方、出雲連満鱈彦については、出雲大社の社家で増上寺と激論し、相手に傷を負わせたため遠島になり、赦免後は故郷へ帰らずに本村で師弟を教え、嘉永2年(1849)に中村肥後宅で客死したと記しています。



■善応寺



■川口社



■森顕胤墓

御師住居と門

河口御師の住居で建築年代が18世紀まで遡れる住居には本庄家・高橋家・中村家の住居がありますが、なかでも本庄家(現飯野氏住宅)の住居は「普請帳」から安永5年(1776)に建てられたこと

が特定できる大変貴重な建物があります。

門の遺構はいくつかありますが、建築年代を特定できるものは次の2つです。



■本庄家

*本庄家の門

寛政12年(1800)の富士山御縁年に建立された薬医門で、三浦家の門より古いものです。川口は文化6年(1809)10月19日にいわゆる「宵恵比須の大火」に見舞われ86戸を焼失していますが、門裏側の桁上や木鼻の部分に焼け跡があり、その痕跡を残しています。



■本庄家門

*三浦家の門

天保12年(1841)建立の薬医門です。将軍家御祈願所御師を名乗った三浦家の門にふさわしい格式のある堂々とした門で、「両御丸御祈願所」の木札がかかっています。両御丸とは江戸城の本丸と西の丸のことです。



■三浦家門

年)・「大元霊」の扁額・隨身門・太白神などがあります。元禄10年(1697)に秋元喬知の実弟である戸田忠真が奉納した狩野法眼邦信が描いた黒駒の絵馬もあります。これは上吉田の浅間神社と対で奉納された物で、上吉田の絵馬も現存しています。



■美麗石



■河口浅間神社本殿

浅間神社(河口浅間神社)



■河口浅間神社鳥居

富士の祭神、木花開耶姫命を祀る河口地区の浅間神社です。貞観の噴火の翌7年(865)『三代実録』は八代郡に浅間明神の祠を建立したと記していますが、これは甲斐で一番古い浅間社の記録として注目されています。この浅間社は現在の河口浅間神社、笛吹市一宮の浅間神社、市川三郷町高田の浅間神社のいずれかであると推測されていますが、決定的な資料は見つかっていません。拝殿の前に祀られている美麗石は、当初祀られた社殿の一部と伝えられています。地元では「お宮前のヒーラ石上れば草履の緒が切れる」と神聖視していますが、以前は「お宮上のヒーラ石上れば草履の緒が切れる」とうたわれていたといわれ、以前は現社殿の裏山にあったことになり、この神社の創立を

考えるうえで、注目される文言だと思われま。

前述の「河口浅間編年史」は、明治20年4月に「ヒーラ石前ヲ掘リテ雷斧石及管玉ノ破片ヲ発見シ神社ニ珍藏ス」と記しています。

現在の本殿・幣殿・拝殿は慶長12年(1607)鳥居成次の再建と伝えられています。背後の山の中腹に大山祇命を祀る山宮社があり、奥の院とされています。しかし本来の旧地は「火打場」の名で伝承され、林道を母ノ白滝方面に進んだ林の中の平坦地にあったと考えられます。

神社の北約100mには「御墓」があり、最初の祝伴直真の墓とされています。

神社の社宝としては、『甲斐国志』にも記載されていますが、大鳥居・三国第一山の銅額(元禄10

母ノ白滝

河口に宿泊した富士信仰の修行者は、この滝で禊をして登拝したと伝えられています。昭和56年発行の『川口村の古事志』は「古老の云うに明治初年頃迄金仏の不動尊を祭った祠があったと云うが今は無く、角行霊神・身禄霊神の石碑が残っているだけです。明治30年頃はまだ導者の参詣もありました」と記していますが、角行・身禄の石碑も今はなく、祭神の栲幡千千姫命を祀る祠があるだけです。栲幡千千姫命は木花開耶姫命の姑であるとされています。ちなみに、湖辺の産屋ヶ崎は木花開耶姫命の孫である鶴茸草葺不合命の誕生の地とされ、河口浅間神社の初申の祭りは孫見祭とも称され、神輿はこの産屋ヶ崎まで渡御する慣例になっています。河口浅間神社の木花開耶姫命を中心に母ノ白滝の栲幡千千姫命(義母)と産屋ヶ崎の鶴茸草葺不合命(孫)が山から湖辺へゆるやかなカーブを描いて配されているわけで、興味深いものがあります。

母ノ白滝は現在では登山者やハイカーの格好の憩いの場になっています。



■母ノ白滝



■登山道



■母ノ白滝神社

- 参考文献
- 『甲斐国志草稿』井出本
 - 『甲斐国志』第三巻1968雄山閣
 - 『河口浅間編年史』中村寅蔵1928
 - 『富士山御師』伊藤堅吉1968
 - 『川口村の古事志』本庄魁平1981
 - 『富士講の歴史』岩科小一郎1983名著出版
 - 『山梨県歴史の道調査報告書 第六集 鎌倉街道(御坂路)』1985山梨県教育委員会
 - 『富士吉田市史』史料編第二巻 古代・中世1992富士吉田市
 - 『富士吉田市史』史料編第四巻 近世』1994富士吉田市
 - 『山梨県史』文化財編1999山梨県
 - 『勝山村史』上巻1999勝山村
 - 『川口村の口碑・史料』2002本庄満

金鳥居 — 倒壊と再建の歴史 — (後)

金鳥居 倒壊と再建の歴史 (後)

明治の再建史料

明治10年10月11日、富士吉田市一帯を強風が襲いました。役場への被害報告書「風難御届」(明治10年10月13日)には、様々な建造物を挙げて、「本月十一日暴風雨之際皆潰又大破等」とし、その中に「金鳥居但シ皆潰」と記されます(※1)。

この明治10年の災害により、翌年には県令藤村紫朗に宛て、願主中麿丸うめから再建の願書が送られます(※2)。この時、再建場所と鳥居の規模を記した図面も添付されていて、元の場所から富士山側に、ずらして再建されたことがわかります。

明治11年に再建された金鳥居

は、写真の普及によって、その姿を現在に伝えられています。写真は上吉田の古い町並みを背景に立つ金鳥居の姿を映しています。鳥居向って右脚部の銅版の表面には「天下泰平国土安穩日月清明風雨和順 明治十一歳戊寅七月吉日再建」と再建の年を記し、向って左の脚部には「文政十三(2字不明)庚寅六月再建」と前回の再建の年月日を記し、下に「食行身禄北行鏡月 仙行伸月」と富士信仰の行者の名前が並び、さらに下に「田辺十郎右衛門 中麿丸由太夫」と記されています。



■金鳥居からの富士山(富士市博物館蔵)

昭和の供出と再建

昭和16年～20(1941～45)年の太平洋戦争では、軍事物資を補充するため、日本全国で金属の供出が相次ぎました。金鳥居も戦時中に供出され、戦後に再興されたといわれています。しかし、供出の年のはっきりとした記録は残っていません。山本逸平著『北富士ノート』(1985 私家本)によると、昭和17年10月17日付の地元の新聞に金鳥居 供出の記事があるとされていますが、当時の主要な地方新聞には、その記事を見つけることができませんでした。

伝承では、これに類する話があります。昭和17年の夏に、金鳥居のすぐ東側の家で生まれた女性は、自分が生まれて数ヶ月後に、金鳥居が供出されると聞かされてきました。供出のための工事が始まるというので、あわてて地域の「組」の者が集まり、金鳥居の前で撮った記念写真に、赤ん坊の自分が写っ

ているそうです。写真(右下)は年月日が記されていませんが、わずかに雪をかぶった富士山に、重ね着の人々が写っており、秋の頃ではないかと推測されます。

金鳥居が供出されてから戦後しばらくは、上吉田には金鳥居がない状態が続きました。次第に市民の間で再建を願う声が高まり、金鳥居再建委員会が結成されました。現金鳥居の金石文によると、昭和30年7月20日に工事が起工、昭和32年7月1日山開きの日に竣工式が行われました。

現在の金鳥居には再建委員会のメンバーを初めとした、寄附の芳名が両脚部にびっしりと刻まれています。再建委員会の委員長は市長である希代圭司、副委員長は市内の資産家の上島修照のほか、上吉田の住人佐藤芳次と御師団の団長小佐野茂が務めています。その他、「市議会議員」、「上吉田民生委

員」、「相談役」 「富士山講社芳名」及び御師を含めた上吉田の住民の名前などが記されています。

金鳥居がない間は、近所の住民からは「鳥居がないとなんとなくおかしい」といった声があがっていたそうです。富士山の信仰物として建立され、中麿丸家が守り伝えてきた金鳥居でしたが、最後は市民の生活の一部として地域に根付き、市民の手で再建されました。



■供出直前の金鳥居

俗世界との境界

最後に金鳥居とは、どのような鳥居であるのか、考えたいと思います。一般に鳥居とは、神社の入口や参道に建てられるものです。鳥居の内側は神域であるとされ、一步入ったときから俗世界とは断絶されます。つまり、金鳥居は俗世

界との境界、それをくぐった先の上吉田という集落は、俗世界と切り離された富士山の神域と考えられます。

金鳥居では江戸時代、夏の登山シーズンに登山客を改める役所が置かれ、道者の名前や人数、国元

が改められました(※3)。吉田の火祭の本日には、神社の2基の神輿を金鳥居の下に据え、神事を行う金鳥居祭が行われます。身内に不幸があつて、火祭の期間遠くへ出かけていた家は、火祭が終わった翌朝、金鳥居の外で近隣の家に迎えられ

る「手間迎え」という習慣があります。いずれも金鳥居を俗世界との境界、村の境、など境の標識としてとられているようです。

(高橋晶子)



■金鳥居を通る御山神輿



■火祭の金鳥居祭

(註)

※1 「風難御届」 明治10年 (田嶋悟「藤村県政と区戸長の位置」『富士吉田市史研究』第13号 1998 富士吉田市史編さん室)

※2 「銅鳥居再建之儀二付願」 図面付 明治11年 (田嶋悟「藤村県政と区戸長の位置」『富士吉田市史研究』第13号 1998 富士吉田市史編さん室)

※3 「富士山内取計方書上帳」 天保9年 (『富士吉田市史』史料編第5巻 近世II 富士吉田市 1997 No.101 所収)

金鳥居の年表

西 暦	和 暦	金鳥居記事	関連事項
1720	享保5年		のちの吉田仙行(中麿丸由太夫源豊)誕生
1733	享保18年		食行身禄富士山の鳥帽子岩にて入定
1760	宝暦10年		北行鏡月(田辺十郎右衛門)没
1782	天明2年	吉田仙行、金鳥居を発願する	食行身禄五十回忌 吉田仙行没
1787	天明7年		食行身禄五十五回忌
1788	天明8年	金鳥居建立(再建か)	吉田仙行七回忌
1794	寛政6年		吉田仙行十三回忌
1814	文化11年		吉田仙行三十三回忌
1815	文化12年	中麿丸より金鳥居再建の願書	
1831	天保2年	金鳥居再建成就	吉田仙行五十回忌
1877	明治10年	金鳥居大風で倒壊	
1878	明治11年	金鳥居再建成就	
1882	明治15年		身禄入定一五〇年祭
1942	昭和17年	金鳥居供出される	
1955	昭和30年	金鳥居再建工事起工される	
1957	昭和32年	金鳥居再建竣工式	



博物館からのお知らせ

御師 旧外川家住宅、公開

平成17年度より整備を実施してきた市内上吉田に位置する旧外川家住宅を4月26日(土)より一般公開します。

御師住宅の特徴である奥に長い屋敷や神殿を設けた部屋等、当時の住宅を整備しました。また、家に伝えられてきた古文書や信仰具などの資料も展示しています。この外川家は、平成20年1月に山梨県有形文化財(建造物)に指定されました。

●施設概要

名称: 御師 旧外川家住宅
 開館時間: 午前9時30分～午後5時
 (入館は午後4時30分迄)
 観覧料:
 大人 100円(団体 80円)
 小中高生 50円(団体 40円)
 (20名以上は団体料金)
 休館日: 火曜日・祝日の翌日



■御師 旧外川家住宅

平成20年事業案内

◇企画展 (タイトルは変更する場合があります。)

- 『写真展—富士への道』平成20年3月1日(土)～5月18日(日)
- 『富士山内に祀られた神仏』平成20年6月～10月
- 『身祿の聖物』平成20年11～12月

◇講座等 (実施月・内容は変更する場合があります。)

- 歴史散歩『外川家と吉田町を歩く』平成20年5月
- 歴史散歩『河口・浅川・船津・そして船津登山道へ』平成20年10月
- 体験学習『縄文工器作り教室』平成20年7月～(全3回)
- 体験学習『ツギ草履教室』平成20年7月

富士吉田市歴史民俗博物館

FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

ご案内

開館時間/午前9:30～午後5:00 (午後4:30迄入館可)
 休館日/火曜日(祝日を除く)、祝日の翌日(日曜・祝日を除く)、12月28日～翌1月3日

観覧料/大人 300円(団体 240円) 団体割引は20名以上に適用
 小中高生 150円(団体 120円)

交通案内/●中央自動車道河口湖I.Cより車で10分
 ●東富士五湖道路山中湖I.Cより車で10分
 ●富士急行線富士吉田駅より山中湖方面バス15分、サンパークふじ下車



タイトルの「MARUBI」は富士山から流れ出た溶岩台地帯を指すこの地方のことは「丸尾」からとったもので、丸尾とは溶岩が流れ出る様子の「転び」が転化(変化)したものとされています。